國學院大學学術情報リポジトリ

中古和文の終助詞・間投助詞「や」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富岡, 宏太, Tomioka, Kota メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000657

中古和文の終助詞・間投助詞「や」

富岡宏太

一　本論文の目的

中古和文の、いわゆる詠嘆の助詞「や」は、終助詞とも間投助詞とも呼ばれ、様々な品詞に後接した例が見られる。次の（1）は、形容詞の終止形に、（2）は感動詞「いで」および助動詞「ず」の連体形「ぬ」に「や」が後接した例である。

（1）「あはれ、いと寒しや」〈源氏物語・夕顔・①一五五頁〉

（2）「いでや、をこがましきことも、えぞ聞こえさせぬや。……」〈源氏物語・藤袴・③三四〇頁〉

「や」の、助詞としての位置づけや意味については、明らかでない部分も多い。そこで、本論文では、まず、文中の「や」の例が僅少で、機能の面でも、文末の「や」と大きく異なることを指摘し、前者を間投助詞、後者を終助詞と呼ぶことを提案する。次に、検討に十分な例数が見られる終助詞「や」に注目して、その特徴を、統語的側面や使用場面から明らかにする。そのうえで、終助詞「や」の意味を明らかにする。なお、用例の引用文中の〔　〕は話し手と聞き手とを、《　》は心内文であることを、（　）は補足説明を示すため、筆者が付した。引用部末の〈　〉内は、出典、巻名（数）、使用テキストの頁数で

ある。

二　議論のための前提

二・一　先行研究

「や」の用法や意味について扱った先行研究は多数あるが、一つの間投助詞が文中・文末の両用法を持つのか、間投助詞と終助詞とで区別すべきか、積極的に論じたものはない。此島正年（一九七三）のように、文中・文末の「や」を間投助詞として一括りにするのが一般的であるが、両者を同一の助詞としてよいかについては検討の余地がある。

また、後に詳述するように、本論文では間投助詞と終助詞とを区別する立場をとるが、その際、多数の例が見られる終助詞「や」の用法や意味も検討が必要である。先行研究の主な関心は、それが詠嘆と疑問のどちらを表すのかという点にある（岡崎正継（一九九六）、近藤要司（二〇一九）、富岡宏太（二〇二〇）など）。そのため、終助詞「や」が表す意味まで詳しく論じたものは、ほとんど見られない。わずかに、近藤要司（二〇一九）、富岡宏太（二〇一四b）が見られるものの、両者ともに、体言に後接する「や」の分析に議論が集中しており、その他の品詞に後接する「や」については、付随する議論として述べられている。「や」の意味を明らかにするには、より細やかな調査考察が必要となる。

二・二　調査方法

本論文では、中古和文の一一作品（竹取物語、伊勢物語、土左日記、大和物語、平中物語、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語）の散文部分に見られる詠嘆の「や」の例を調査した。まず、国立国語研究所の「日本語歴史コーパス平安時代篇」を使用して、品詞―大分類―を「助詞」とし、語彙素を「や」として検索を行った。この中から、韻文の例や会話文中の和歌引用の例を除外した。韻文の例を除くのは、連体修飾句―被修飾句間に「や」が現れる（3）のような例が、韻文には一定数見られるが散文には見られないなど、助詞の使用傾向に差異が見られるためである。

（3）郭公鳴くや五月のあやめぐさあやめも知らぬ恋もするかな（古今集・四六九番）

そのうえで、目視で確認しながら、疑問の例や並列の例を除外する。さらに、「ぞや」など、他の助詞が承接する例も、複数の助詞が承接することで、特殊な用法を持つことがあるため、

除外する。たとえば、「や」は文中用法の例が僅少であるが、「ぞや」にはそのような特徴はないという違いがある。ただし、禁止の「そ」は、単独で使用されることがほぼなく、「な―そ」という構文で禁止文を構成するため、命令文を構成する活用語命令形と類似の位置づけと考えられる。よって、これに後接した「や」は対象とした。

加えて、次の（4）の「まことや」も、全体で「そういえば」とか「そうそう」といった、話題転換機能を果たしているため除外した。

（4）まことや、檜隈川は渡るとは見し、富小路殿の右大臣殿の方に、いひたるぞ。〈平中物語・三十九段・五三二頁〉

以上のようにすると、例数は七二四例となる。これらを対象に考察を進める。

三　文中の「や」の特殊性

本節では、文中の「や」の例数が少なく、また、その用法も「ぞや」や「よ」からの類推で説明可能であることを示す。今回の調査範囲では、文中の「や」は一一例あり、うち一〇例は、使用理由が説明できるものであった。次の（5）～（8）をもとに説明する。

（5）《なぞや心づから今も昔もすずろなることにて身をはふらかすらむ》と、さまざまに思し乱れたるを、……。〈源氏物語・明石・②二六三頁〉

（6）「あな苦しや。暁の別れや、まだ知らぬことにて、げにまどひぬべきを」〈源氏物語・総角・⑤二三九頁〉

（7）……、わづらはしく、《いかに聞くところや》など、憚りたまふことなくて、ともかくも、ただ御心にかけてもてなしたまふべくぞ、たびたび聞こえたまひける〈源氏物語・若菜上・④七五頁〉

（8）業遠の朝臣の車のみや、夜中暁わかず、人の乗るに、いささかさる事なかりけれ。〈枕草子・一本の二八・四六六頁〉

（5）は、副詞「なぞ」に「や」が後接した例である。もし係助詞であれば、「や」は不定語より前に来るはずであるので、間投助詞の例である（小田勝（二〇一五））。この例が見られるのは、次の（9）のように、「ぞや」が文中用法を持つからと考えられる。

（9）「……。上にも聞こしめしおきて、『宮仕に出だし立てむと漏らし奏せし、いかになりにけむ』といつぞや

のたまはせし。……」〈源氏物語・帚木・①九六頁〉

（9）は不定語「いつ」に「ぞや」が後接した例である。「不定語＋ぞや」にひかれて、「なぞ＋や」の例が現れたのであろう。つまり、「や」単独ではなく、「ぞや」というまとまりからの類推と考えられる。「なぞや」の例は述部の省略例も含め、八例ある。

（6）は（10）の終助詞「よ」からの類推と考えられる。

（10）「古代なる御文書きなれど、いたしや、この御手よ。昔は上手にものしたまひけるを、年にそへてあやしく老いゆくものにこそありけれ。……」〈源氏物語・行幸・③三一二頁〉

（10）は「評価を表す形容詞＋や」の直後に、「評価対象を表す名詞句＋よ」の文が現れており、「よ」のついた名詞句が後続文の話題の中心となっている。この「よ」の代わりに「や」を使用したのが（6）と思われる。実際、（6）は文中用法ではあるが、「暁の別れや」を独立語ととることもできる。

（7）（8）は存疑例である。（7）は「不定語を含む名詞句＋や」の例で、「あらむ」などが省略された可能性があるため挙げたが、阿里莫本では「いかに聞くところや」が「きゝ所」となっていて、確例ではない。（8）は、「や」の使用理由が判然としないが、係助詞「こそ」がないにもかかわらず文末は已然形になっており、本文に疑いのある例である。

このように、散文に間投助詞の文中用法は一一例しかなく、うち八例は「ぞや」という助詞の承接した形からの類推、一例は「よ」からの類推で説明できる。残り二例は存疑例である。間投助詞「や」が文中用法と文末用法を持つと考えた場合、文中の「や」の単独用法は、あまりに例数が少なく、用法も極めて狭い。残りはすべて、他の助詞と承接した例である。この点で、「や」単独で種々の語に後接し、例数も多い文末用法と大きく異なる。そこで本論文では、文中用法のものを間投助詞、文末用法のものを終助詞として、明確に分ける立場を採り、十分な例数の見られる後者について詳しく論じていくことにする。

四　終助詞「や」の分析

四・一　分析方法

ここからは、終助詞「や」の七一三例を対象に、統語的指標と場面的指標の両面から調査考察する。統語的指標では、「や」の現れる文タイプや「や」の前接語の特徴を、場面的指標では、会話文や消息文といった対人場面か独話・心内文といった非対

人場面かという観点に加え、対人場面における話し手と聞き手との関係も見ていく。

四・二　統語的指標

四・二・一　文タイプ

まずは統語的指標から見ていく。日本語記述文法研究会編（二〇〇三）では、文タイプを、「表現類型のモダリティ」の観点から、情報系の「叙述」と「疑問」、行為系の「意志」・「勧誘」・「行為要求」、いずれにも属さない「感嘆」の計六種に分類している。このうち、「や」が現れるのは、叙述・疑問・行為要求・感嘆の四種である。（11）に叙述の、（12）に疑問の、（13）に行為要求の、（14）に感嘆の例を挙げる。

（11）「……。黄金求むる絵師もこそなど、うしろめたくぞはべるや」〈源氏物語・宿木・⑤四四九頁〉

（12）「この人をばいかが見たまふや。……」〈源氏物語・柏木・④三二四頁〉

（13）「待ちたまへや。……」〈源氏物語・空蟬・①一二一頁〉

（14）《はかなの契りや》と思し乱るること、かたみに尽きせず。〈源氏物語・紅葉賀・①三一九頁〉

（11）は「ぞ」による係り結びの句に後接した叙述の例、（12）は「不定語＋活用語連体形」という疑問文相当句に後接した疑問の例、（13）は命令形に後接して二人称に行為の実現を求める行為要求の例、（14）は感動喚体句を構成する感嘆の例である。意志や勧誘の文には現れない。これは、助動詞「む」に「や」が後接した例が、すべて疑問の読みになるためである（岡崎正継（一九九六）、林淳子（二〇一六））。

さらに、例数の内訳を見ると、叙述の例が四四一例、疑問の例が二例、行為要求の例が一二例、感嘆の例が二五八例である。文相当句に後接する終助詞に、叙述の例が多いのは当然である。ここでは、感嘆の例が多く、疑問の例が極端に少ないことに注目したい。

感嘆の例が非常に多いのは、（14）のような感動喚体句の例のほか、次の（15）のような形容詞・形容動詞語幹による感動文の例が多いからである。

（15）「……。あなめでたや」〈源氏物語・宿木・⑤四六九頁〉

情報系の文に目を転じると、疑問は二例しかない。一例は（12）に挙げたので、もう一例を（16）に挙げる。

（16）「いづこや。いたう暮れぬほどぞよからむ。……」〈堤中納言物語・四三四頁〉

これら、疑問の二例は、いずれも中古の典型例と言いがたい。

（12）は本文に異同があり、保坂本と国冬本では、「いかが」がない。この場合の「や」は、疑問の係助詞文末用法である。また、（16）は、不定語の名詞に「や」が後接して文が終止しているが、こうした例も、次の（17）のような並列の例以外、他に見られず、不審な例である。

（17）かく内裏参りや何やとかねて思しかはすとも、さしもえはべらじ。〈源氏物語・紅梅・⑤四三頁〉

この例は、「内裏参り」と「何か」が並列されている例で、本論文の検討対象から外したものである。こうした複数の対象を並列する場合にしか、不定語に「や」が後接して文が終止する例はない[1]。つまり、終助詞「や」には、疑問文末に現れる確例がないのである。そこで、以下ではこの二例は除いて検討する。

ここまでを踏まえ、文のタイプから見た結果をまとめなおすと、終助詞「や」は、叙述、行為要求、感嘆の文末に現れた例のみが見られるということになる。

このうち、感嘆と行為要求の例に注目すると、次のような特徴がある。「や」による感嘆の文の典型は、「形容詞・形容動詞語幹＋の＋体言＋や」の文型をとる感動喚体句であるが、これは、ほぼすべての例が、感動の対象が発話場に存在する場合に使用されたものである（富岡宏太（二〇一四b）。

（18）かく戯れたまふけしきのしるきを、《あやしのわざや、親子と聞こえながら、かく懐離れず、もの近かべきほどかは》と目とまりぬ。〈源氏物語・野分・③二七九頁〉

（18）は、源氏と玉鬘の様子を見た夕霧の心内文で、眼前事態に言及する例である。こうした例と、源氏と藤壺の現在の状況を述べる前掲（14）のような、話し手が置かれた現状に言及する例が、「や」による感動喚体句のほとんどを占める。この特徴は、（15）のような形容詞・形容動詞語幹の感動文も同様である。

一方、行為要求の例は、命令形に「や」が後接した「命令形＋や」の例と「な―そ＋や」の例である。富岡宏太（二〇一四a）では、「命令形＋や」の例が、即時の行動を求める緊急性の高い例に限られることを指摘した。次の（19）（20）のような例である。

（19）〔女→男〕「などかさてはものしたまふ。早う来や」〈平中物語・一七段・四八二頁〉

（20）〔尼→浮舟〕「もののたまへや。いかなる人か、かくてはものしたまへる」〈源氏物語・手習・⑥二八七頁〉

（19）は、隠れて立つ男への発話で「早う」とあることからもわかるとおり、即時の実現を望んでいる。（20）は意識の薄れている浮舟への発話で、やはり、今すぐ何かを言うことを求めている。この緊急性の高さは、「な―そ＋や」の場合も同様である。

（21）（匂宮ガ時方ヲ）御覧じて、「いみじくかしづかるめる客人の主、さてな見えそや」と戒めたまふ。〈源氏物語・浮舟・⑥一五三頁〉

この場面も、（からかいではあるが）今すぐ、人から見られない状態にするよう求めている。

以上、文のタイプから「や」を見ると、

・「や」には疑問の確例が見られない。よって、話し手にとって疑いようのない事柄を表す句に後接すると考えられること

・感嘆・行為要求の例においては、「や」は話し手の現在・眼前の事柄に言及すること

が指摘できる。なお、叙述の文の特徴は、前接語の特徴を明らかにすることで、明らかになると思われる。そこで、以下では「や」の前接語を検討していく。

四・二・二　前接語の特徴

ここでは、「や」の前接語の特徴を探る。前接品詞の内訳を次の［表一］にまとめた。なお、形容詞・形容動詞は、以降の議論では、形容語として一括して扱うこととする。

［表一］終助詞「や」の前接語の品詞

動　詞	72
形容語	256
名　詞	149
副　詞	25
感動詞	80
助　詞	1
助動詞	128
計	711

［表一］から、最も例数が多いのは形容語で、次が名詞、助動詞、感動詞、動詞、副詞とつづく。助詞は一例のみであるが、これは、禁止の「そ」以外の助詞が承接した例を除いたためであるので詳述しない。論の展開上、形容語、名詞、感動詞・副詞、助動詞、動詞の順に説明する。

まず、形容語に後接する例は、次のような、評価を表す例に大きく偏る。

（22）「何事ぞとよ。かしがましや」〈落窪物語・巻一・三八頁〉

（23）御おぼえのほど、いと軽らかなりや。〈源氏物語・常夏・③二四八頁〉

（22）は「かしがまし（＝うるさい）」という、（23）は「軽らかなり（＝軽々しい）」という評価を形容語で表したものである。

また、（24）（25）のように、形容語語幹による感動文に「や」が後接する例も多い。

（24）「あな心づきなや。……」〈源氏物語・少女・③五六頁〉

（25）「あな正無や。入りたまへ」〈枕草子・第七段・三九頁〉

（24）は「心づきなし」、（25）は「まさなし」の語幹に「や」が後接した例である。

次に、名詞に後接する例の典型は、（26）（27）のような感動喚体句の例である。

（26）「あやしのことや」〈堤中納言物語・四二六頁〉

（27）「あな、うちつけのことや」〈平中物語・三六段・五二七頁〉

こうした例が一三九例と、体言に「や」が後接する場合の大半を占める。

残りの一〇例は、（28）のような、いわゆる呼びかけの例が七例、（29）のような「こちや」の例が二例、（30）に示す特殊な例がそれぞれ一例ずつである。

（28）「あが君や」〈和泉式部日記・三八頁〉

（29）「こちや」と言へばついゐたり。〈源氏物語・若紫・①二〇七頁〉

（30）「人々の、花、蝶やとめづるこそ、はかなくあやしけれ。……」〈堤中納言物語・四〇七頁〉

（28）は、宮から女への発話で、呼びかけの例、（29）は尼君が眼前の若紫を呼び寄せる場面で、これも呼びかけと同様に考えてよい。

これに対して（30）は、花と蝶を並列しているが、断定辞のようにも見える。これは、（31）と同じような、中古の終わり際に現れた新しい表現と思われる。

（31）……、世の中の物見、なにの法会やなどある折は、……〈大鏡・三〇〇頁〉

こうした例は、今回の調査範囲では他にない。（30）は「虫めづる姫君」（一〇五五年ころ）の例であるから、新しい表現がごく早い時期に現れた例として、措いておく。

以上から、体言に後接する「や」は、感動喚体句か呼びかけの例のみであることになる。

続いて、感動詞・副詞に「や」が後接する例である。感動詞に後接する例を挙げる。

（32）「いでや、冬の夜の目さへ氷にとぢられて明かしがたきを明かしつるかな」〈和泉式部日記・八〇頁〉

（33）「くはや、昨日の返り事。……」〈源氏物語・末摘花・①三〇一頁〉

これら感動詞はいずれも、発話時における話し手自身の感情を率直に投げ出したものか、発話に対する応答に用いられたものである。

これは副詞に後接する例も同じである。（34）（35）に例を挙げる。

（34）「……」と言へば、御前にさぶらふ人々、「いさや、えこそ聞こえ定めね」と聞こえあへり。〈源氏物語・東屋・⑥五〇頁〉

（35）「申させはべらん」とて立つを、「しばしや」と召し寄せて……、〈源氏物語・橋姫・⑤一三七頁〉

（34）も（35）も直前の発話を受けて発話である。特に「いさ」は感動詞とも捉えられる。このように、感動詞と副詞の例には、共通の特徴が見られるのである。

今度は助動詞の例である。富岡宏太（二〇二〇）では、助動詞の終止形に「や」が後接する場合の特徴を見出した。それによると、助動詞が前接する例は、（36）（37）のように話し手の評価を表す例、（38）のように眼前事態を表す例、（39）のように話し手の現状について述べるものばかりである。

（36）「さこそあなれ。あやしうねぢけたるわざなりや。……」〈源氏物語・澪標・②二九一〉

（37）「いと屈じたりや」〈源氏物語・梅枝・③四一二頁〉

（38）「花乱りがはしく散るめりや。……」〈源氏物語・若菜下・④一四〇頁〉

（39）「……。こと繁くのみありて、（私ハ）とぶらひ参でずや」〈源氏物語・常夏・③二四三頁〉

（36）には、「あやし」「ねぢけたる」といった、評価を表す修飾語句がある。（37）は、副詞「いと」で修飾されていることからもわかるとおり、「屈じたる」という動詞句が評価語句である。次に、（38）は、眼前事態に言及した「めり」の例、（39）は、話し手の現状について述べた「ず」の例である。このほか、過去の助動詞「き」が後接した例もあるが、その場合、次の（40）のように、話し手の評価を含む例に限られる。

（40）「いさや、ことなることもなかりきや」〈源氏物語・帚木・①八二頁〉

（40）は、「格別なこともなかった」というように、話し手の評価が入り込んでいる。このような例でないと、「き」に「や」は後接しないということである。さらに、「む」や「じ」に終助詞「や」が後接した確例はない。

また、動詞終止形に終助詞「や」が後接するのは、（41）のように一人称主語で発話者の評価が入り込む場合、（42）のように眼前事態の場合である（富岡宏太（二〇二〇）。

（41）〔北の方→落窪姫君〕「……。このごろ御心そり出でて、《（アナタガ）化粧ばやりたり》とは（私ニハ）見ゆや」〈落窪物語、巻一、八三頁〉

（42）……（男ガ）昼間に入り来るを（女房ガ）見て、女（ニ女房ガ）、「にはかに、殿、おはすや」と言へば、……。〈堤中納言物語・四九六頁〉

（41）は、話し手である北の方にとってどう見えるか、という評価を問題にした例であり、（42）は、目の前に男が来ていることを告げるものである。

この結果は、富岡宏太（二〇二〇）で除外した、係り結びの文や連体形終止文などでも、ほぼ変わらない。（43）に係り結びの文で眼前事態に言及した例、（44）に連体形終止文で話し手の評価を表す例を挙げる。

（43）「そよ、誰がならはしにかあらむ。思はずにぞ見えたまふや。……」〈源氏物語・澪標・②二九一頁〉

（44）「めでたきや。誰をか取りたまふ」〈落窪物語・巻一・八九頁〉

また、次の（45）は、直接には、話し手の評価や情意が入り込まず眼前事態に言及していない例であるが、評価を表す例に準じて考えることができる。

（45）「……。我は、まして、人もゆるさぬものを、拾ひたりしや」〈源氏物語・宿木・⑤四七五頁〉

（45）は、夕霧が、周囲の反対を押し切って落葉宮を引き取ったことに言及する例である。形容語など、一目で評価を表す語句とわかる語はない。しかし、この例も、単に引き取ったことが重要なのではなく、「人もゆるさぬものを（＝皆、許可しないのに）」という点が大事なのだと考えられる。ここに落葉の宮を引き取ることへの評価（他者の納得を得られない）が含まれると考えれば、これまでの例に準じて説明できる。なお、これらのいずれにも該当しない例が若干数あるが、それらも説明可能である。この点については後述する。

四・二・三　統語的指標から見た終助詞「や」

ここまでの分析で得られた特徴を次にまとめる。

・文タイプから見た特徴

①「や」が現れるのは叙述・行為要求・感嘆の文末で、疑問文末には現れた確例はない。よって、話し手にとって

疑いようのない事柄を表す句に後接すると考えられる

②感嘆・行為要求の例においては、「や」は話し手の現在・眼前の事柄に言及する。

・前接語から見た特徴

イ．形容語後接の例は話し手の評価や情意を表す例ばかりで、終止形だけでなく語幹に後接した例も多い。

ロ．名詞後接の例は感動喚体句を構成する例や呼びかけの例ばかりである。

ハ．感動詞に後接した例が一定数見られる。

ニ．助動詞や動詞に後接する例は、話し手の評価を含む例、眼前事態に言及する例、話し手の現状を表す例のいずれかに限られる。

さらに、前接句全体に視野を広げると、ほぼすべての例に、次のいずれか、もしくは両方の特徴が見られる。

③話し手の情意や評価を表す（イ、ロの一部、ニの一部）。

④話し手の現在・眼前の事柄に言及する（イ、ロ、ハ、およびニの一部）

③、④の両方に該当するのが、形容語が前接する例のすべて、名詞が前接する例のうち、感動喚体句の例、それに、動詞・助動詞が前接する例のほぼすべてである。これに対し、①のみに該当するのは、助動詞「き」が前接する場合、②のみに該当するのは、名詞が前接する呼びかけの例、感動詞の例、動詞の例の一部（＝(42)）である。

文タイプの特徴②と前接語句の特徴④は共通するから、「や」の特徴は次のようにまとめなおすことが可能である。

・「や」は話し手にとって疑いようのない事柄に言及する場合に使用される。

・ほぼすべての例が、話し手の情意や評価を表す場合、話し手の現在・眼前の事柄に言及する場合のいずれか、もしくは両方に該当する。

では、後者の「ほぼすべて」に該当しない例がどのようなものか、確認してみよう。

四・二・四　若干数の違例について

前述のように、係り結びの句末に「や」が現れる場合には、話し手の評価や情意が入り込まず、眼前事態にも言及していない例が七例ある。(46)～(49) に挙げる。

(46) ……、年ごろ何ごとをか思ひけんとぞ、とり返さまほしきや。〈源氏物語・早蕨・⑤三六四頁〉

(47) ……、（兵部卿宮ガ）いとなつかしげに、思ひしこと

の違ひにたる恨みをのたまはするに、（玉鬘八）面おかん方なくぞおぼえたまふや。〈源氏物語・真木柱・③三八五頁〉

（48）「思し取りたることぞあらむや。……」〈堤中納言物語・四〇八頁〉

（49）《……、まことに心ばせあらむ人は、わが方にぞ寄るべきや、されど難いものかな、人の心は、》と思ふにつけて、……〈源氏物語・蜻蛉・⑥二七〇頁〉

（46）（47）は地の文の例で、登場人物の心内や感覚に言及しているから、話し手の評価とも眼前事態ともいいがたい。また、（46）（48）（49）では、「まほし」「む」「べし」に「や」が後接しているが、終止形後接の「や」には、こうした例はない。このような違例が、助動詞に三例、動詞に四例、見られた。

注目すべきは、これらがすべて、文中に「ぞ」の現れた「ぞ―や」の文型である点である。小田勝（二〇〇六）は、「ぞ―や」の例が一定数現れる理由を、「ぞ」が「自領域知識の述べ立て」を表すことから説明している。これは、本論文の主張とも矛盾しない。「ぞ」による係り結びの句も、話し手にとって疑いようのない事柄に言及するから、「や」が後接するのである。このように、違例に見える例も、本論文の考え方で説明可能である。(2)

四・三　場面的指標

四・三・一　使用場面

ここからは場面的な特徴を見ていく。まず、「や」の対人性をはかるため、使用場面を、会話文・消息文などの対人場面、独話・心内文などの非対人場面に分ける。地の文は、どちらとも決めがたいため、単独で一分類とした。（50）～（54）にそれぞれの例を挙げる。

（50）〔中宮定子→清少納言〕「くちをしの事や。……」〈枕草子・九五段・一八九頁〉

（51）〔六条御息所→源氏〕「いと恐ろしげにはべるや。……」〈源氏物語・澪標・②三一三頁〉

（52）〔あこぎ〕「をかしの御手や」〈落窪物語・巻一・二五頁〉

（53）〔源氏〕《げに言ふかひなのけはひや、さりとも、いとよう教へてむ》と思す。〈源氏物語・若紫・①二三八頁〉

（54）大臣の北の方、御さいはひを、「めでたし」とは古めかしや。〈落窪物語・巻四・三四一頁〉

（50）は定子から清少納言へ、（51）は六条御息所から源氏への

発話で、対人場面の例である。次に、(52)は独話、(53)は心内文で、いずれも非対人場面の例である。(54)は地の文の例として挙げた。これらの例数をまとめたものが次の［表二］である。

［表二］場面ごとの「や」の使用率

対　人	378
非対人	200
地の文	133
計	711

［表二］から、対人場面での使用率は、非対人場面の一・九倍程度であることがわかる。対人場面によく用いられるが、非対人場面にも一定数用いられる助詞ということができよう。つまり、対人性の強さは指摘できても、現代語の「ね」のような、「心内文には用いられない」という特徴はないということである。

四・三・二　話し手と聞き手との関係

次に、対人場面における話し手と聞き手との関係を見る。富岡宏太（二〇一四b）では、「や」による喚体句が、下位者から上位者へは使用されないということを明らかにした。これは、終助詞「や」全体の特徴なのであろうか。次の［表三］に調査結果を挙げる。

［表三］終助詞「や」の話し手と聞き手の関係

上→下	111
同　位	130
下→上	42
その他	95
計	378

具体例は次の(55)〜(58)のとおりである。

(55)〔内大臣→雲居雁〕「……。人々も近くさぶらはで、あやしや。……」〈源氏物語・常夏・③二三九頁〉

(56)〔男たち同士〕「あはれ、いと寒しや」〈源氏物語・夕顔・①一五五頁〉

(57)〔源氏→帝〕「あながちに隠して、心やすくも御覧ぜさせず悩ましきこゆる、いとめざましや。……」〈源氏物語・絵合・③三七七頁〉

(58)〔男→女〕「あな、わびしや。さらにさもあらず」〈平中物語・二二段・四九〇頁〉

(55)は上位者から下位者への例、(56)は同位者どうしの例、(57)は下位者から上位者への例、(58)は上下関係を確定で

きない男女間の例（＝「その他」）である。

ここで注目すべきは、上位者から下位者への例や同位者どうしなど、配慮の要らない例が圧倒的に多いこと、その一方で、下位者から上位者への使用例が一定数見られることの二点である。つまり、「や」そのものは、上位者に使用できないのではなく、使用されにくい助詞であるということがわかる。

五　終助詞「や」の意味

それでは、ここまでをもとに「や」の意味を考える。統語的指標からは、

・話し手にとって疑いようのない事柄に言及する場合に使用されること

・ほぼすべての例が、話し手の情意や評価を表す場合、話し手の現在・眼前の事柄に言及する場合のいずれか、もしくは両方に該当すること

の二点が、場面的指標からは、

・対人場面の例が非常に多いものの、非対人場面の例も一定数見られること

・上位者から下位者、同位者どうしなど、配慮の要らない関係性の場合に使用されやすいが、下位者から上位者への使用例も一定数見られること

の二点が明らかになった。ここから想定される「や」の意味は、次のようなものである。

・「や」は、「臨場的な感情表出」という意味を持つ。

この「や」の意味がはっきりと表れるのは、文タイプが感嘆の例と行為要求の例とである。感嘆の例は、感動喚体句や形容語語幹による感動文など、発話場に密着した情意や評価を表すものである。これは、話し手の臨場的な感情表出の典型である。また、行為要求の例に見られた緊急性も、「臨場的な感情表出」をしながら要求する場面が、今すぐ話し手の思惑通りになってほしい場面であるからであろう。さらに、臨場的な感情表出には疑問を挟み込む余地がない。文タイプの特徴との関係は、以上のように説明できる。

前接語の面では、呼びかけを表す名詞や、感動詞・副詞の例が見られた。これらはいずれも発話場に密着した表現であるから、臨場的な感情表出を行なう「や」と相性が良い。もちろん、呼びかけの例においても、「や」が呼びかけを表すのではない。名詞を単独で投げ出すことで呼びかけとなり、「や」は単に感情表出を担っているのだと考えられる。

このほか、形容詞の終止形や動詞の終止形などで話し手の評価を表す例、眼前事態に言及する例も、臨場的な感情表出とは矛盾しない。過去の助動詞「き」に後接した例もあったが、これも、話し手の評価が入り込む例である。つまり、事態が発生した時にどう思っていたかではなく、発話時にどう思うかを述べるものであるから「や」がつきうるのだと説明できる。さらに、違例に見える「ぞ―や」の例も、「ぞ」による係り結びの句が話し手にとって疑いようのない事柄を表すなら、臨場的な感情表出と相性は悪くない。

場面的指標についても同様である。臨場的な感情表出が行われる場合、聞き手の発話や行動への応答や反応であることが十分にありうる。そのため、結果として聞き手のいる場合が多くなる。同様のことは、いわゆる詠嘆の終助詞「かな」でも確認されている（富岡宏太（二〇一五））。「や」の方が「かな」よりも対人性が強いのは、臨場的な感情表出という意味から、聞き手の発言や行動に対する反発を表す場合に使用されることが多いためであろう。しかし、「や」そのものの対人性が極めて強い、というわけではないから、聞き手は必須の存在ではない。そのため、非対人場面の例も見られるのだと思われる。さらに、対人場面において、上位者から下位者の例や同位者どうしの例が多いのは、こうした発話態度をとりやすいのが、配慮の要らない関係だからである。もちろん、必要があれば下位者から上位者への使用もありえなくはないから、こうした例も見られるということになる。実際、下位者から上位者への使用例には、諫めの場面に終助詞「や」が使用された例や、古くから仕える（いわば、比較的発言力のある）女房が主人に向かって「や」を使う例が見られる。このように、「や」の意味を「話し手の臨場的な感情表出」と考えると、様々な例について、説明が可能になるのである。

六　本論文の結論

本論文では、次の諸点を述べた。

・散文では、文中の間投助詞「や」の例は僅少で、他の助詞からの類推によるものと考えられる例がほとんどである。よって、文末の「や」を、間投助詞の文末用法と考えるのではなく、終助詞として分析することを提案する。

・統語的指標から見ると、「や」の前接句は、話し手にとって疑いようのない事柄に言及する場合に限られる。また、ほぼすべての例が、話し手の情意や評価を表す場合、話し

手の現在・眼前の事柄に言及する場合のいずれか、もしくは両方に該当する。

・使用場面を見ると、対人場面の例が多いが、非対人場面の例も一定数見られる。また、対人場面の例に限ると、上位者から下位者、同位者どうしなど、配慮の要らない関係性の場合に使用されやすいが、下位者から上位者への使用例も一定数見られる。

・以上を基に考えると、「や」は、「話し手の臨場的な感情表出」という意味を持つと考えられる。

なお、終助詞「や」は、感動喚体句の場合を除き、文相当句に後接する。言い換えれば、「や」があってもなくても文の構成には影響しない。[3] その点で終助詞「かし」や「な」と共通する。こうした、他の終助詞との関係性については、今後の課題とする。

注

（1）不定副詞「なぞ＋や」の例で述部が省略された例の中には、諸注釈で終助詞「や」と解されている例がある。

・もの心細く、《なぞや、世に経ればうさこそまされ》と思し立つには、…〈源氏物語・賢木・②一一三頁〉

この例について、新編日本古典文学全集同頁の訳は「どうしたことなのか」、新日本古典文学大系『源氏物語一』（岩波書店）三六三頁脚注三一では、「どうしたことか」のように訳している。しかし、単に「どうしたことか」と訳すと、直後の、「俗世間に生きながらえているから辛さが増すのだ」という点とのつながりが悪いように思われる。この例には、次のような類例がある。

・「……。なぞや。尼にやなりなまし」〈落窪物語・巻三・二五〇頁〉

新編日本古典文学全集の同頁頭注一三では、この「なぞや」について、「このままでいられましょうかの意が省略」と説明している。当該例も、この例と同じく「どうしてこのままでいられようか（＝出家しよう）」のような意で、文中用法の述部省略例と考える。

（2）次の例は、これまでの説明が適応できないが、本文に不審な点がある。

・「からうじて参りたりしかど、御門さしてさらにあけざりしかば、わびしくてなむ帰りまうで来にしや。……」〈落窪物語・巻一・一二八頁〉

話し手による評価を表した例でも眼前事態を表した例でもない点で、他の例と異質である。ただし、前者は文中に係助詞「なむ」が現れた「なむ―や」の例で、他には、この文型は見られない。落窪物語にしか用例が見られないことと併せると、存疑例である。

（3）喚体句の場合は、「や」を除いた「形容語語幹＋の＋体言」の例がない。また、使用場面の観点でも、「や」による喚体句は非対人場面の例の方が多いことが明らかになっている（富岡宏太（二〇一四b））。とすると、体言と用言のどちらに後接するのかで区別した方が良いようにも思われるが、「や」の意味に関する本論文の結論には影響しないので、今後の課題としておく。

・使用テキスト

・竹取物語、伊勢物語、土左日記、大和物語、平中物語、落窪物語、枕草子、

源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語、古今和歌集→新編日本古典文学全集（小学館）
・池田亀鑑（一九五三～一九五六）『源氏物語大成』（中央公論社）→異同の確認に使用。
・国立国語研究所（二〇二〇）『日本語歴史コーパス』（バージョン2020.3、中納言バージョン2.5.2）https://chunagon.ninjal.ac.jp/（二〇二〇年九月一一日確認）

参考文献

岡崎正継（一九九六）『国語助詞論攷』おうふう
小田勝（二〇〇六）「文末に終助詞を伴う係結をめぐって—源氏物語を資料として—」『岐阜聖徳学園大学紀要〈外国語学部篇〉』四五集
小田勝（二〇一五）『実例詳解古典文法総覧』和泉書院
此島正年（一九七三）『国語助詞の研究—助詞史素描—増訂版』桜楓社
近藤要司（二〇一九）『古代語の疑問表現と感動表現の研究』和泉書院
富岡宏太（二〇一四a）「中古和文における「命令形ヨ」・「命令形ヤ」」『国語研究』七七号
富岡宏太（二〇一四b）「中古和文における体言下接の終助詞カナ・ヤ」『日本語の研究』一〇巻四号
富岡宏太（二〇一五）「「詠嘆」と対話・独話—源氏物語の助詞カナ—」『国語研究』七八号
富岡宏太（二〇一七）「中古和文の助詞カシ」『日本語の研究』一三巻四号
富岡宏太（二〇二〇）「中古和文の文末助詞「や」—係助詞文末用法と終助詞」『群馬県立女子大学国文学研究』四〇号
日本語記述文法研究会編（二〇〇三）『現代日本語文法④第6部モダリティ』くろしお出版
林淳子（二〇一六）「意志をめぐるYes/No疑問文の表現機能—現代語と中古語の比較を通して—」『日本語文法』一六巻一号

付記　本論文はJSPS科研費18K12400の助成を受けている。